野村アセットマネジメント株式会社
2025 年 4 月

第 3 回プロダクトガバナンス有識者会議　ご発言要旨

開催日：2025 年 3 月 18 日
プロダクトガバナンス有識者会議メンバー（3 名）：
野尻 哲史氏　　合同会社フィンウェル研究所　代表
藤沢 久美氏　　株式会社国際社会経済研究所　理事長
高井 宏章氏　　経済コラムニスト、千葉商科大学付属高校校長

1．ファンド・レビュー・レポート

全般について

- レポートについて、お客様の声をフィードバックしてもらえるようにしておくことが重要。課題点や優れている点を客観的に指摘してくれるウォッチャーを作っておくことも大事ではないか。

- レポートの内容を外部に発信し丁寧に説明する役割が必要だと思う。

ファンドの評価について

- 運用実績評価について、外部評価機関のレーティングのみに頼るのではなく、各ファンドの目標を基に評価を行うべきではないか。

- 外部の評価機関も限られた情報の中で大量のファンドを評価することになるため、一部には適切とは言えない評価も存在すると思う。そのような評価をそのまま開示するのではなく一定の考慮が必要なのではないか。

- 投資信託は受益者と運用会社との契約であり、当初の契約において他社より優れた成績を上げることを約束しているわけではないため、他社比較ではなく、組成時に定めたベンチマークや目標に対する達成状況（契約内容）を基にした評価がより適切だと感じる。

- 各ファンドの目標やベンチマークとの比較評価を導入するとしても、成績不振の原因が明らかに外部要因に起因する場合はそれも考慮すべきではないか。単に目標やベンチマークとの比較だけで機械的に評価するのではなく、原因を十分に精査したうえで適切な評価を付す必要があるのではないか。

開示について

- ファンド・レビューを通じた改善点について詳細に記載されているものの、全体を通して読まなければ内容が理解できず、読み手に対する負担を大きくしている。サマリーなどを設けて分かり易く要点を整理することが望ましいと思う。また、改善点等をまとめて別途開示するなどして、記録として残るような形にしたほうが良いのではないか。

- 投資一任業者（投資判断をお客様の代わりに行う金融機関）が運営するファンドラップ経由で投資される自社ファンドについて評価対象外とするのであれば、より平易な表現でその理由を記載したほうが良いのではないか。

- ファンド・レビュー・レポートは情報の鮮度が高いうちに、できるだけ早くリリースするのが良いと思う。

2．プロダクトガバナンス活動全般

- ガバナンスを効かせるという観点で組成時どのように評価可能なプロダクトを作るか、その議論をより深く行うことが必要ではないか。カテゴリーがなく評価ができないというものについては、どのように評価するのか組成時に議論していくのが良いのではないか。

- 一部のファンドについては、適切に牽制を効かせる枠組みの整理が必要な部分も見えてきたと感じる。これまでの課題を整理し、新規ファンドについてはガバナンスが適切に機能するような新たな枠組みを考えてみてはどうか。

- ファンドラップについては、既存のファンド・レビューの枠組みで捉えるのは難しいと思った。投資一任業者と野村アセットマネジメントが一体となり、ひとつのパッケージとして運用する場合には、プロダクトガバナンスをどのように機能させるかについて、新たな仕組みを構築する必要があるのではないか。

以上